

団体の爆買いから多様化する中国人旅行者

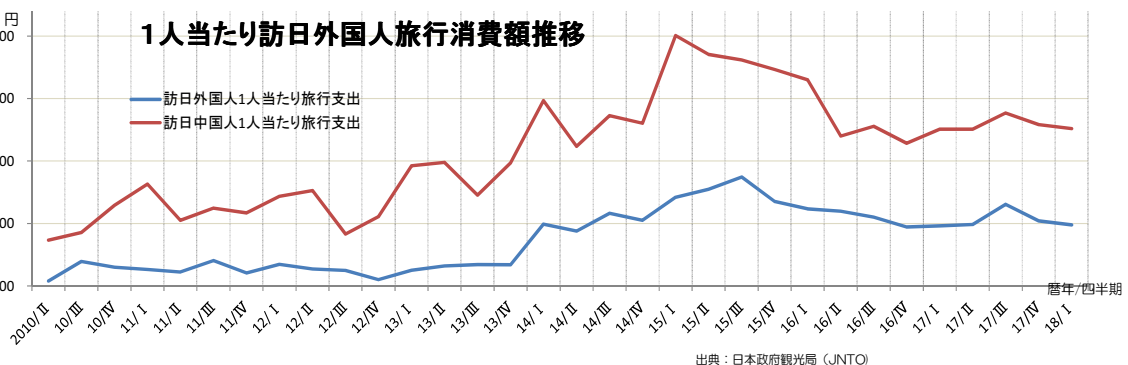
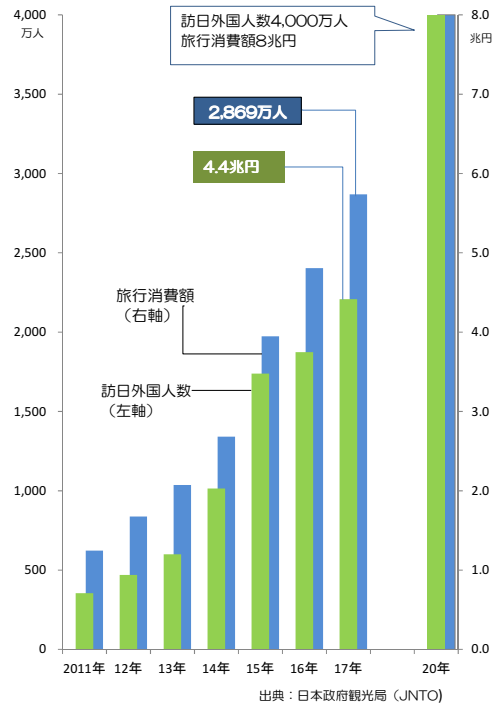
◆2017年に引き続き、18年1～3月期も好調な訪日旅行者

日本政府観光局の発表によると、2017年の訪日外国人旅行者は2,869万人（前年比19.4%増）となり、統計を取りはじめた64年以降最多となった。訪日外国人の旅行消費額も4兆4,162億円（同17.8%増）となり、こちらも過去最高となっている。18年1～3月期の訪日外国人旅行者も762万人（前年同期比16.5%増）、旅行消費額も1兆1,343億円（同17.2%増）と好調に推移している。

政府は20年の東京オリンピック・パラリンピック開催年に、訪日外国人4,000万人、旅行消費額8兆円を目標としている。さらに30年には6,000万人、15兆円に拡大させる目標を立てた。

16年に従来の「20年2,000万人、30年3,000万人」としてきた目標を「20年4,000万人、30年6,000万人」へと変更したものだ。当時は中国人が前年比倍増の499万人へと急増し、15年の訪日外国人が1,974万人（前年比47.1%増）へ急増した。この急増の勢いをベースに計画を上方修正したものである。ただ15年は為替レートが対ドル121円、対人民元19.4円（6,7月は20円台）の相当な円安となり、記憶に新しい中国人の爆買い現象の発生した年でもある。以下のグラフでも15年

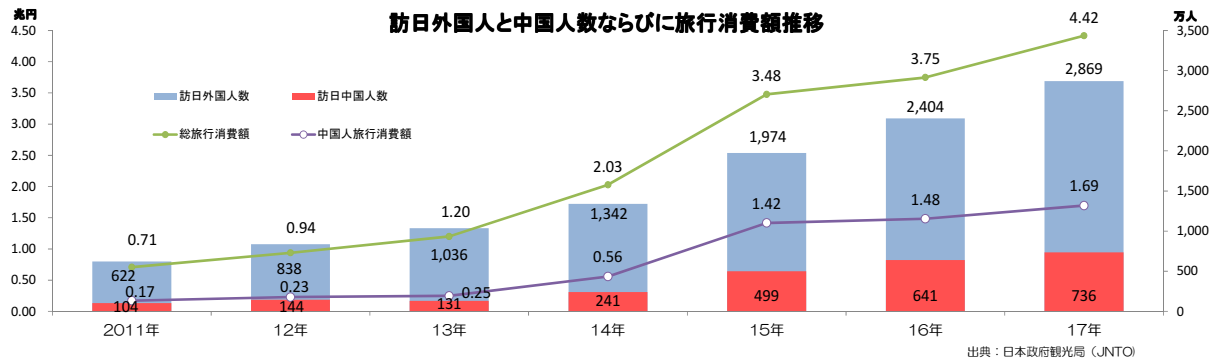
訪日外国人数と旅行消費額の推移



ハイライト

は中国人の1人あたり旅行支出は急増しているのがわかる。

一方16年に入ると15円台の円高元安に転じ、消費金額もかなり下がっている。ただ、グラフの示すように中国人の1人当たりの旅行支出は、平均よりもかなり高く、常に1位を争っている。訪日旅行客数を考慮すると、旅行消費額で他国を圧倒しているといえそうだ。下記のグラフのように17年の中国人旅行客は人数で約25%を占める一方、旅行消費額全体の4割を占めている。



◆ 中国人旅行客、爆買いから越境ECと体験型消費へシフト

18年1～3月期の訪日中国人は前年同期比17.9%増の194万人と平均の16.5%増を上回ったが、為替が17円前後とやや円高で落ち着いたこともあり、1人あたり旅行支出は22.6万円（同0.2%増）にとどまった。15年の爆買い以降中国政府は消費財に対する輸入関税を15年6月、16年1月、17年1月さらに17年12月と4回改定してきた。ハンドキャリーなどによる個人輸入品に対する関税を引き上げるとともに、越境ECなどによる関税を引き下げて、両者間のバランスをとることで、海外の商品を正規に輸入し、国内の流通市場を通して販売するように仕向けてきた。日本での中国人旅行客による爆買いが消えた大きな要因である。中国人に対するビザの発給件数を見ると、16年は423万件（前年比12%増）となったが、団体観光ビザが175万件（同10%減）に対し個人観光ビザは163万件（同44%増）で、1次ビザ392万件（同8%増）に対し数次ビザは31万件（同97%増）とほぼ倍増している。来日中国人は、個人旅行のリピーターへ中身が大きく入れ替わりつつあるようだ。

17年の2位韓国714万人、3位台湾456万人の人口はそれぞれ5千万人、2.3千万人である。6,000万人の目標達成には、14億人の中国人訪日旅行客をどれだけ呼び込めるかがポイントになりそうだ。

【森山博之】